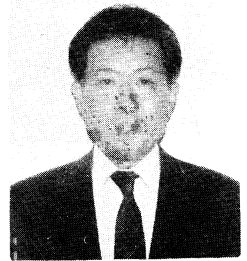


水理実験センターの今後に期待すること

水理実験センター長 河村 武



水理実験センターが設立されて10年余、設立当初の苦労話も昔語りとなった。現在の職員数は専任教官2名、技官（準研究員を含む）4名、事務官1名にセンター長（兼任）を加えて8名である。このうち創設期からの職員は2名にすぎない。これまでの在職者の総数は20名、センター長は私で3代目である。かつての在職者の方々は現在、他大学や研究機関などで活躍されている方がほとんどである。これらの方々に寄稿をお願いするには、まだセンターの歴史も浅いので、今回は歴代のセンター長に代表して、一文をお願いした。センターの歴史は、巻末の資料を御参照いただきたい。

周知のように、当センターは、主要な大型研究施設として、200m近い大型水路と、直径160mの熱収支・水収支観測圃場の二つを持つ小じんまりした研究センターである。これまでの積年の地道な努力がようやく実りつつあり、国内だけでなく国外にもその存在が注目されるようになってきた。そこで、現在在職中のセンター職員に、センターの将来に何を期待しているか、今後5年ないし10年という短期間に焦点をあてて自由に発言してもらい、その声を次にまとめた。

大型水路については、混合砂礫の移動の研究が緒につき、粒径の揃った礫と比べて異なる粒径の混合した砂礫の方がはるかに移動しやすいという成果が世界的に注目を浴びた。この機会に国外・国内の研究者を招いて共同研究や国際シンポジウムを開きたい。また大型水路だけでなく、小型水路をぜひ整備して、効率よく研究を進めようしたい。そのためには、現在の仮設実験棟を早急に建て替えるなければならない。新しく建てる屋内

実験棟は、学内の共同研究の場として、水理実験ならば何でもここに持ちこんでやれるようにしたい。そして学内でそれぞれ独立に行われている研究の交流をはかりたい。

熱収支・水収支の実験圃場の特徴は、長期にわたり継続して観測値を収集して、気候学的な知見を得ることにある。今後も観測を続けることはいうまでもないが、これまで蓄積されてきたデータの重味を考えて、近い将来、本格的に気候学的な広域水収支の解析を行いたい。また観測データを多目的にかつ即時的に利用できるルーチンシステムを作り上げたい。

また水理実験センターの観測結果を用いた研究を実地に野外に应用するための実験流域を設けて比較研究を行いたい。

これらの希望ないし期待は、従来からの研究を進める過程で折りにふれて出てきたもので、とりたてて目新しいものではない。しかし、それだけに地に足の着いた切実な要望であり、成果が期待される課題である。

創設期の基礎固めの10年は、職員の数が少ないこともあって、大型施設を中心に、足場を固める必要性から、ややもすれば研究活動やテーマが狭い範囲に限定される傾向が見られたことは否めない。しかし、ようやくこの時期になって研究者の意識も少しずつ広がり、開かれたセンターを志向するようになってきている。今後の10年、限られた予算の中でセンター職員の努力によってこれまでの成果を発展させることはもちろんであるが、より大きな夢を実現できるよう、内外の御支援・御協力と御激励を期待している。